

日本語教育学の研究の進め方 —指導経験・投稿経験から見えてくるもの—

**How to develop research-design and methodology in Japanese language education:
Through the experience of supervising graduate students and writing
for academic journals**

石黒 圭・柳田 直美

要旨

本稿は、日本語教育学を学ぶ大学院生、および大学院入学を希望する大学院受験生のために、2名の執筆者が、自身の指導経験・投稿経験に基づいて、研究の進め方のヒントを紹介するものである。前半は、執筆者の一人（石黒）が、自身の指導経験をもとに、研究から論文執筆までのプロセスを紹介し、後半は、執筆者のもう一人（柳田）が、自身の投稿経験をもとに、論文執筆から投稿までのプロセスを紹介する。

キーワード：日本語教育学、大学院生、大学院受験生、研究計画、論文投稿

1. はじめに

本稿は、日本語教育学を学ぶ大学院生、および大学院入学を希望する大学院受験生のために、2名の執筆者が、自身の指導経験・投稿経験に基づいて、研究の進め方のヒントを紹介するものです。もちろん、個人の限られた経験に基づくものであるため、一般化は難しいでしょうし、読者の立場によっては異論・反論も予想されます。ただ、そうした点を含め、今後本稿が、日本語教育学研究を考えるとときの議論の材料になることを願います。

本稿の内容は、2014年10月11日（土）に富山国際会議場で行われた日本語教育学会秋季大会の論文セミナー「論文を書こう！—研究から論文へ、論文から投稿へ—」の内容に基づいています。しかし、執筆にあたり、内容を大きく改変しました。したがって、本稿は、当該論文セミナーとは独立した内容であるとお考えください。

本稿の内容は次のとおりです。2節では、執筆者の一人（石黒）が、指導者としての経験に基づき、研究から論文作成までのプロセスを紹介し、3節では、執筆者のもう一人（柳田）が、投稿者としての経験に基づき、論文作成から投稿までのプロセスを紹介します。

2. 研究遂行のプロセス—指導者としての私の経験（石黒）

2005年4月、日本語教育学を中心とした研究・教育を行う大学院生を育成する目的で、言語社会研究科の第2部門、日本語教育学位取得プログラムが開設されました。開設されてから10年が経過し、多様な大学院生と接するなかで、大学院生がどのように研究を進

め、それを教員がどうサポートしていくか、おおよその流れが見えてきました。2節では、文科系の大学院生の研究というプロセスを以下の五段階に分けて考えることにします。

- | | |
|---------------|-------------|
| (1) テーマを選ぶ | (4) 調査を実施する |
| (2) 問いを立てる | (5) 論文を執筆する |
| (3) 先行研究を紹介する | |

以降では、(1)~(5)の各段階を取り上げ、それぞれの段階において大学院生が行きづまりがちな留意点と解決法を、私自身のささやかな指導経験にもとづき、(1)~(5)の順に記述していくことにします。論文の執筆から投稿については、3節に譲りますので、そちらの内容をぜひ参考にしてください。

2.1 テーマを選ぶ

2.1.1 流行は避ける

研究を始めようとするとき、研究テーマの設定が必要になります。講座制が色濃く残る理科系の大学院では、研究テーマが指導教員から与えられることもあります。文科系の多くの大学院では、テーマは自分で設定するものです。テーマは研究の根幹をなすものであり、よいテーマを設定できるかどうか、研究の成否に直結します。

研究にたいする意欲の高い学生は、研究テーマは自分で決めたいと思うものですが、なかにはそうでない学生もいます。とくに、やりたいことが見つからず、とりあえず大学院に入学してモラトリアム期間を過ごしたい学生、あるいは、日本語教師になるためには修士の学位が必要で、学位そのものが目当てで進学した学生の場合はそうでしょう。

しかし、そうした学生にお勧めできない方法があります。一つは、今流行の研究テーマを追いかけること、もう一つは、指導教員の研究テーマの真似をすることです。

今流行っているからという理由で研究テーマを選ぶのはリスクが高いものです。研究は新規性が重要なので、流行りはじめならばまだしも、流行りが終わりかけていると、鮮度の低さがかえって目立ってしまいます。おいしいところはすべて誰かがやっちゃっており、結果の出にくいやっかいなところしか残っていないのです。

もちろん、流行するにはそれなりの理由があり、それが自分のほんとうにやりたいことと重なってれば、覚悟を決めてやる気概も必要です。しかし、流行っているという理由だけで選ぶのは、後悔のもとです。むしろ、自分が新しい研究分野を開拓し、流行らせてやるぐらいの心意気があると、研究自体が楽しくなってきます。

2.1.2 指導教員のテーマとつかず離れずを保つ

指導教員の研究テーマの傘の下に入るのもリスクが高いものです。指導教員はその道のエキスパートであるため、自分の研究分野にたいしてとくに厳しい目をもっています。そのため、何をやってもダメ出しをされる可能性が高いのです。

もちろん、当該の研究分野に当初から強い関心があり、かつ十分に精通し、その分野の第一人者である指導教員の指導を求めて大学院に入学した場合は別でしょう。しかし、中途半端な覚悟で近づくと、指導教員の鋭い刀でびしっと斬られてしまうこともあります。

一方で、指導教員の刀の切れ味を恐れるあまり、指導教員の指導可能な範疇からあまりに遠く離れてしまうと、指導が難しいという理由で突き放されてしまうこともあります。その意味で、指導教員のテーマとはつかず離れずの距離を保つのが理想です。

2.1.3 研究のタネは教室に落ちている

研究テーマを選ぶとき何よりも優先すべきは、自分自身の興味です。興味が持てそうもないテーマは、どんなに書きやすそうでも長続きしないので、やめたほうが賢明です。

大学院を出て日本語教師になりたいだけで、教育にしか興味がなく、そもそも研究自体に興味を抱けない人はどうすればよいのでしょうか。興味のある教育をとおして研究に興味を持てるように努力すればよいのです。

そうした人は、きっと日本語教育学の研究を誤解しているのでしょう。応用研究である日本語教育学の研究は、「研究のための研究」ではなく「教育のための研究」です。教育と研究のあいだに明確な線を引くことは難しいですし、そもそも線を引こうという発想自体が誤りです。日本語教育学のよいところは、研究が教育の役に立ち、教育が研究の役に立つという循環にあるのです。

多年にわたり教育活動を続けてくると、どうしても飽きが出て、授業がマンネリになり、質が落ちがちです。ところが、授業を研究すると、今まで考えなかった視点で授業が見られるようになり、授業の質が自然と向上します。これが日本語教育学の醍醐味です。

日本語教育経験者で授業に喜びを見いだしている人はそのスキルをみがき、授業をさらに楽しくするにはどうしたらよいか、学習者にとって楽しい授業とは何かを追求できるテーマにすればよいのです。研究のタネは、教室という現場の至るところに落ちています。

2.1.4 読者の関心を考慮する

一方、研究にもともと意欲がある学生にも、問題はあります。よく見られるのは、自分の関心のみを追求し、そこから出てこない学生です。そうした学生は自分が夢中になればよく、他人がどう思うかをほとんど気にしません。自分のテーマを金科玉条のごとく守り、変えることを拒みます。しかし、自分が興味の持てるテーマであっても、自分しか興味の持てないテーマであっては、研究は単なる自己満足に終わってしまうでしょう。

研究の価値を測るのは論文の書き手ではありません。論文の読み手です。論文は読まれるためにある以上、読み手におもしろいと思ってもらわなければ意味がありません。テーマ選びも同じです。ほんとうにおもしろいテーマは、分野を越えて受け入れられます。

おもしろいテーマを考えたい向きにはサンキュー・タツオ (2015) がお勧めです。そこで紹介されている「ヘンな論文」は、一見ヘンですが、じつはまったく関係のない分野の人間でも盗み見したくなるようなおもしろい論文です。奇をてらう必要はないのですが、幅広い層の読み手におもしろいと思ってもらえることをテーマ選びの観点に加えることは重要でしょう。読み手は、論文のタイトルに表れる研究テーマを見て、その研究に接近するかどうかを決めるものなのです。

2.1.5 実現可能性を冷静に考える

また、研究に意欲のある人は、概して気合いが入りすぎ、がんばりすぎてしまう傾向があります。夢は大きいほうがよいのですが、人間の能力には限界があることを忘れてはなりません。データ収集にかかる労力が大きすぎ、収集の見こみの立たないもの、データ量が多すぎて、分析に膨大な時間がかかるもの、分析方法が難しく、自らの手に負えないものなどはやめたほうが賢明です。

研究は成果を上げて初めて評価の俎上に載ります。自分の研究を遂行するうえでどのぐらいのコストがかかるのか、限られた年限でそれが実現可能なのかについて冷静な分析を経てテーマを選ぶ心がけが必要です。そうでないと、のちのち悲惨なことになります。

2.1.6 発展性のあるテーマを選ぶ

一方で、これなら修士課程の2年間でできそうという、ちょうどよいサイズの研究テーマに出会える人もいます。しかし、そうした学生が無事修士課程を終え、博士課程に入ったとたんに伸び悩むことがあります。それは、目の前のテーマが終わったあと、次に何をするかを考えていなかったことに原因のあることが多いようです。

研究というのが長く続く営みである以上、先行研究を道しるべにしなから、自分の目の前のテーマが片づいたら、次に向かう行き先を考えておく必要があります。博士課程に進む希望を持つ者は、修士論文を博士論文の1章とするような気持ちで研究テーマを選ぶと、失敗は防げます。囲碁や将棋にかぎらず、強い人はかならず先を読んでいるものです。

2.2 問いを立てる

テーマ選びは重要ですが、それだけでは研究になりません。大学院を受験するとき、研究計画を書かされますが、そこに研究テーマを書かない受験生はいません。ところが、そのテーマが問いの形を取っている受験生となると、非常に少ないのが現実です。

リサーチ・クエスチョンと呼ばれる「研究上の問い」が立てられて初めて研究は具体的に進みはじめます。研究テーマは、「～についてやりたいです」の宣言にすぎません。「～について」から脱却し、「～をどうやりたいのか」に移行する必要があります。

具体的に考えてみましょう。日本語教師志望の漫画好きの受験生が、漫画を使った日本語教育を研究テーマにしたいと考えたとします。それをそのまま文字にすると、

研究テーマ①：日本語教育における漫画について

となります。しかし、これが研究テーマにふさわしくないことは、一目でわかります。目的は日本語教育であり、漫画は手段でしょうが、漫画という手段を使って日本語教育にどのように貢献するのかが見えないのです。

そこで、日本語教育の教材として漫画を取りあげ、授業を試してみればおもしろいかもしれないと思いつきます。そこで考えられる研究テーマは、

研究テーマ②：漫画を使った日本語教育の授業実践

となるでしょう。研究テーマ①よりもよくなりましたが、これでもまだ漠然としています。漫画を使ってどんな授業実践をしたいのかが見えないからです。

読む・書く・聞く・話すという4技能で授業実践を考えた場合、漫画は読むものなので、読解教材として役立つ可能性がまず考えられます。しかし、漫画を漫然と読むだけでは授業になりません。そこで、漫画を読んで語彙の習得が進めば、日本語教育に役立つのではないかと考えます。漫画は会話で成り立っているので、漫画を読みこめば、会話に頻出する表現の習得に役立つでしょう。漫画好きの学習者が多い教室なら、勉強という意識を持たずに、楽しみながら日本語の語彙力が鍛えられそうです。その結果、研究テーマは、

研究テーマ③：漫画を使った日本語読解教育の語彙習得の授業実践

くらいに設定できるでしょう。

しかし、研究テーマはまだ問いの形になっていません。そのため、「漫画を使った日本語読解教育の語彙習得の授業実践」を報告したとしても、それは研究にはなりません。

そこで、このテーマを疑問文で表す工夫が必要になります。そこで、研究テーマ③を、問いの形にしてみましょう。

研究テーマ④：漫画を使って多読の読解授業をしたら、日本語の語彙習得が進むか

ずいぶんよくなりましたが、まだ漠然としています。日本語の語彙習得には多様な面があり、比較の対象がないと、語彙習得が進んでいるかどうか確かめようがないからです。

そこで、比較という観点をに入れて研究テーマを設定してみましょう。

研究テーマ⑤：漫画を使って読解授業をしたら、原作やアニメを使った場合と比較して日本語の語彙習得が進むか

もちろん、漫画、原作、アニメは同じ作品場面でなければなりません。たとえば、「坊っちゃん」「走れメロス」「銀河鉄道の夜」のような文豪の書いた有名な作品なら、漫画化、映画化されているものもあり、また原作もやさしくリライトされたものがあるためお勧めです。また、上橋菜穂子さんの作品やスタジオジブリの作品のなかにも使えるものがあります。漫画は絵本の一種なので、絵から文章理解のヒントが得られます。また、振り仮名のあるものも多いため、読みの補助も得られます。一方、アニメとは異なり、文字があるので、とくに漢字圏の学生は、語彙の意味を文字から得やすそうです。また、自分のペースで読めるという点も、映像とは異なる利点です。

いわば漫画は、原作とアニメのいいところ取りをした特徴を持ちますが、原作とくらべて言語の情報量が少ない、アニメとは違って絵に動きがなく、セリフにパラ言語情報がないという弱点もあります。そうした漫画の長所・短所が語彙習得にどのように影響を与えるかは興味深いところです。一般の人でも興味を持ってもらえそうなテーマになりつつあるのではないのでしょうか。

まだまだ詰めなければいけないことはたくさんあります。どのレベルの学習者を調査対象にするのか。その学習者の日本語学習の目的は何か。どのような語彙の習得を促進させたいのか。そのためにはどのようなジャンルのどの漫画が適切なのか、などです。しかし、ここまでくれば、研究対象を絞る作業も楽しんで進められそうです。

2.3 先行研究を紹介する

2.3.1 先行研究の紹介は論文らしさのアリバイ工作ではない

論文のなかでは、先行研究を紹介しなければいけないという意識は大学院生なら誰もが持っています。しかし、「なぜ」先行研究を紹介しなければいけないかという意味がわからないと、先行研究のよい紹介はできません。

先行研究の紹介に見られる一つの誤解は、関係のありそうな論文のリストを作ればよいという誤解です。そうした意識を持つ人は、関係のありそうな論文を、インターネットなどで適当に見つくり、相互の関連を考えず、簡単な要旨とともにひたすら列挙します。

ひょっとすると、先行研究の紹介は、論文を書くにあたっての儀式ぐらいに思われているのかもしれませんが、しかし、その認識は誤りです。先行研究の紹介の意味は、先行研究が、自分の論文の本論とどのような関係があるのかを明確にすることです。自分の研究をさておいて、先行研究をいじってみても仕方がないのです。こうした意識が欠けてしまっていると、先行研究の紹介は単なる論文らしさのアリバイ作りに終わってしまいます。

2.3.2 先行研究は単なる批判の対象ではない

先行研究の紹介に見られるもう一つの誤解は、紹介した研究の問題点をかならず批判しなければならないという思いこみです。論文の査読者が、自分の研究が引用された論文を読みながら、自分の研究の主旨が十分に理解されていないとこぼしているのをしばしば耳にします。引用される側は、的外れな批判がとて多いと感じているのです。

そうした的外れな批判が起きる原因は、先行研究の紹介は、問題点を批判して自己の論文の価値を高めるために行われるものだという誤解から生じています。ともかく問題点を批判しなければいけないと思ひこみ、難癖をつけようとするので、被引用者の怒りを招いてしまうのです。むしろ、先行研究は参考文献、すなわち自分の研究の参考にさせていた文献だと考え、先人に一定の敬意を払う心がけが大切です。

先行研究を積極的に批判するかどうかは、競争相手の数にも関わるでしょう。競争相手が多く、すでに先行研究が多い分野で勝負する場合は、先行研究を真剣に読みこみ、厳しく批判することもときには必要です。あれもよい、これもよいでは、自分のオリジナリティが出せず、研究にならないからです。たとえていうと、電車のなかで席に座りたいときにすでに席が埋まっていた場合、正当な理由を述べて（＝批判する）席を譲ってほしいという意思をきちんと伝え、席を譲ってもらう必要があるのと同じです。

一方、競争相手が少ない、まだ開拓の余地が大きい分野の場合は、批判は不要です。電車のなかの席はまだがらだからです。そうしたときに、すでに座っているひとにどいてもらう（＝批判する）必要はありません。座っている人に声をかけて、あいだに座らせてもらえばよいのです。

2.3.3 先行研究の紹介は自己のオリジナリティ確認

先日、小学生の娘に突然「勉強」と「研究」の違いを聞かれて焦りました。「勉強」はすでに答えがあることを自分の力で答えが出せるようになること、「研究」は誰も答えを知らないことを自分の力で初めて明らかにすることと答え、ことなきをえました。

論文の先行研究の章は、自分の研究テーマに関連することはすでにいろいろ成果が出ているが、自分が明らかにしようとしていることは、まだ誰もやっていないということを示すための場です。研究は初めてのことでないと価値を持ちません。だから、自分が初めてだということをアピールする必要があります。そのための先行研究です。

2.3.4 先行研究の紹介は研究史のなかに自己を位置づける営み

論文の先行研究の章を見ると、その研究者の研究力が透けて見えます。有能な研究者は自分の研究に複数の角度から光を当てて見せます。たとえば、ビジネス・コミュニケーションの断りについて論文を書いている研究者の場合、ビジネス日本語、接触場面、会話分析、ポライトネスといった分野について、それぞれ研究史を丁寧に整理し、そのなかに自分の

研究の位置づけ、どこが新しいかを的確に述べていきます。研究史の整理の手際の鮮やかさを見ていると、その人の視野の広さと豊富な勉強量を感じざるをえません。

2.3.5 先行研究の紹介は自分の研究を読んでほしい相手へのラブコール

研究を進めていくと、先行研究のなかに軸となる著作や論文が生まれます。それが、身近な指導教員のこともあるかもしれませんが、多くは面識のない研究者でしょう。しかし、学会に出席するようになると、顔もわかるようになり、学会の懇親会で思いきって声をかけ、論文の抜き刷りを渡したりするかもしれません。

目標となる研究者が出てきたらしめたものです。その憧れの先生が自分の論文をどんなふう to 評価してくれるだろうという、ラブレターを書くようなときどきとした気持ちで論文が書けるようになります。今、学会で主要な地位を占めている先生も、かつて大学院生だったとき、当時の大御所の先生に、同じように心をときめかしていたのです。

2.4 調査を実施する

研究をするためには、研究対象となるデータが必要です。そのデータは、質的研究か、量的研究か、あるいは、実態研究か、意識研究か、さらには、理論研究か、実践研究かなど、研究目的や研究方法によって多岐にわたります。このように、立場によって研究方法は異なりますが、いずれの場合も、データを収集する調査という過程を経なければ、論文を書くことはできません。

調査をする場合に大切なのは失敗しないことです。調査は、研究者自身に負荷のかかる調査と、調査協力者に負荷のかかる調査があります。前者は失敗すると、膨大な時間と労力が無駄になりますし、後者の失敗は協力者に迷惑がかかりますので、さらに深刻です。

調査の失敗を減らすポイントは七つです。以下、順に示します。

2.4.1 パイロット調査をする

パイロット調査というのは、いきなり大規模の調査をするのではなく、大規模の調査をするまえに実験的に行う小規模の調査のことです。20名を調査するまえに、一人でも二人でもよいので、ためしに調査を行い、うまくいくかどうか確かめてください。うまくいけば問題ありませんし、うまくいかなければ調査方法を再検討して万全を期してください。

2.4.2 リハーサルをする

たとえば、録音による調査をする場合、「音が小さかった」「雑音が入っていた」「スイッチが入っていなかった」「ICレコーダが途中で止まった」「電源が抜けていた」など、さまざまなトラブルがあるものです。実際に調査協力者を相手に調査をするまえに、自分自身が調査対象者になって調査を試みましょう。それで防げるミスもあるものです。

2.4.3 フェイスシートをしっかりと作る

とくに、多数の人に調査をお願いする場合、調査協力者の属性を記入してもらうフェイスシートの整備が重要です。年齢、性別、母語、日本語のレベル、日本語学習歴、使用教科書、日本への留学経験の有無・期間など、あらかじめ紙に書いてもらいましょう。もちろん、個人情報ですので、取り扱いはくれぐれも気をつけなければいけません。

2.4.4 調査協力者の調査許可をしっかりと取る

調査は倫理的な問題がありますので、調査内容を従前に説明し、調査協力者から承諾書をしっかりと取らなければなりません。目的の調査、謝金などの諸条件、データの公開の範囲（文字のみ、音声まで可、映像も可。学会発表での公開の可否。インターネット上での公開の可否）などをしっかりと伝え、調査協力者のサインをもらう必要があります。

2.4.5 失敗したときの保険をかける

データは複数の手段で取るのがお勧めです。たとえば、作文の執筆過程を調べたい場合、産出された作文に加え、ディスプレイの動画像、執筆者の手元のビデオ画像、執筆者の発話プロトコル・データ、さらにはフォローアップ・インタビューなどを同時に記録しておく、あとで作文の執筆過程を複線的に把握できますし、いずれかが不十分なデータでも別のデータで補うことができます。

2.4.6 査読者の目を意識する

よく「何名のデータを取れば十分ですか」と聞かれます。とても困る質問です。明確な解答がないからです。何名以上なら OK かというのは、研究者の立場や考え方によって異なります。しかし、何名かの教員に尋ねると、こうした質的研究ならば何名、量的研究ならば何名というような漠然としたラインが見えてくるものです。また、人数だけでなく、性別、年齢、母語、学習経験などのバランスも重要です。母語と日本語で調査する場合、どちらから始めるかで結果が違ってくるおそれがありますので、全体として半数ずつになるようにカウンターバランスを考慮する必要もあります。査読の段階で「しまった！」とならないよう、研究の仕込みの段階から査読者の目を意識する必要があります。

2.5 論文を執筆する

論文執筆については、詳細は石黒（2012）などに譲り、ここでは基本的な心得だけ紹介することにします。まず、論文は「書き手の書きたいことを書く」ものではなく、「読み手の読みたいことを書く」ものです。内田樹さんは、学術性の本質は贈与にあると考え、「論文はその『まだ見ぬ読者』を宛先にした『贈り物』です。」と、インターネットのブログ『内

田樹の研究室』の「卒論の書き方」(http://blog.tatsuru.com/2010/08/03_1235.php) で述べています。至言です。

しかし、「まだ見ぬ読者」を想定するのは慣れるまでは難しいものです。そこで、投稿前に自分の論文を読んでもくれる身近な読み手を二人持つことをお勧めします。一人は「的確で厳しいコメントをくれる人」、もう一人は「無条件で励ましてくれる人」です。

また、私自身は、一般の読者を対象とした商業出版を好みますが、論文とは自ずとスタイルが変化します。商業出版は不特定多数の読者であり、予備知識はほとんど持ち合わせていないと考えて書きます。一方、読み手は少数の専門家であり、深い予備知識を有しています。学会誌に論文を投稿するときには、査読委員の氏名をかならず確認します。どのような人が読むか、具体的な顔が思い浮かぶと、中途半端なことが書けなくなります。論文は厳しい真剣勝負の場であることを再認識させられます。

3. 論文投稿のプロセス—投稿者として私の経験（柳田）

本節では、筆者が執筆したある投稿論文の投稿から採録までの過程を例に、論文投稿のプロセスを紹介したいと思います。

3.1 投稿論文の出発点

まず、紹介する投稿論文の元となった研究の出発点について述べます。投稿論文は、2004年に筆者が執筆した修士論文『日本語非母語話者との接触場面において母語話者の情報やりとりストラテジーに非母語話者との接触経験が及ぼす影響』¹（筑波大学大学院修士課程地域研究研究科）の一部を元に執筆したものです。

筆者は、大学時代に地域のボランティア日本語講座で週1回、地域の外国人に日本語を教えていました。大学3年生の冬のある日、初級の講座に参加していた日本の会社に勤務する日系人の若い男性から、「先生の日本語はわかるけど、会社の人と話していることは、全然わからない…」と言われました。その時は、「日本語の先生は外国人とたくさん話しているから、よくわかるんですよ」と答えたのですが、その彼の一言がきっかけとなり、外国人と日本人のコミュニケーションを円滑に進めるためには何が必要なのかを考えるようになりました。そこで着目したのが、外国人の受け入れ側である日本人はどのような言語的調整をしているのか、特に、日本語教育関係者以外の一般の日本人はどのような言語的調整をしているのか、そして、それらは外国人との接触経験を経てどのように変化するのかということです。これが筆者の研究の出発点であり、投稿論文もこのような目的意識を持って執筆しました。

¹ 本研究の詳細については、柳田直美 (2015) 『接触場面における母語話者のコミュニケーション方略—情報やりとり方略の学習に着目して』 ココ出版 を参照してください。

3.2 投稿論文の概要

本節で紹介する投稿論文（以下、投稿論文）の概要は以下の通りです。

(1) 論文題目

柳田直美（2010）「非母語話者との接触場面において母語話者の情報やり方略に接触経験が及ぼす影響—母語話者への日本語教育支援を目指して—」『日本語教育』145号、pp.49-60

(2) 要旨

日本の多文化化が進む現在、多文化共生社会実現に向けて、非母語話者の日本語学習への支援は活発だが、身近な非母語話者との意思疎通に困難を抱える母語話者への対応は不十分である。そこで本稿では、母語話者と非母語話者が参加する接触場面において母語話者が情報を提供する場面に着目し、母語話者のコミュニケーション方略に接触経験が及ぼす影響を分析した。分析の結果、(1) 接触経験の多い母語話者は、情報の切れ目が明確な文単位の発話を多く用いていること、(2) 接触経験の多い母語話者は、理解チェックを用いて、非母語話者に対して躊躇なく理解確認をしていること、(3) 接触経験が自己発話の修正の種類に及ぼす影響は少ないが、接触経験の多い母語話者は、非母語話者からの不理解表明がなくても自発的に発話修正を行っていること、の3点が明らかになった。この分析を通して、母語話者に対する非母語話者とのコミュニケーション支援のあり方を示した。

3.3 論文投稿までのプロセス

3.3.1 最初の投稿

3.1 で、投稿論文は2004年に執筆した修士論文が元になっていると述べました。実は、修士論文提出後、一度、論文を投稿したのですが、残念ながら不採用になってしまったのです。あまりに悲しかったためか、いただいた査読コメントはどこかに行ってしまいました。ふり返ってみると、不採用の理由は、「投稿論文」とは何かということがまったくわかっていなかったこと」につきます。それは以下の3つです。

(1) 投稿論文は修士論文の縮小版ではない

投稿の際、筆者は修士論文の全体をまとめて投稿しました。しかし、紙幅の制限がない修士論文に対し、学会誌はページ数が決められています。規定のページ数で十分に語る内容に絞る、ということが大切なのです。

(2) 投稿論文は研究の売りが明確に示されているものである

どこかに行ってしまった査読コメントの中に、「先行研究との違いは何なのですか」というコメントがあったことを覚えています。(1)とも関連しますが、投稿論文は、先行研究で明らかになっていることを踏まえたうえでの新規性が求められます。そのためには、紙

幅が足りないからと言って自分の研究の成果だけを並べてもいけませんし、逆に先行研究との違いが分からないような書き方をしてしまうこともいけません。その研究の価値が限られた紙幅の中で明確に述べられていなければならないのです。

(3) 投稿論文は指導教官や研究仲間などのチェックを経るべきものである

(2) のように研究の売りを明確に示すためには、やはり、指導教官や研究仲間、可能であればその研究を知らない人（友人や家族）に事前に目を通してもらうべきでしょう。読み手に正確に自分の考えを伝えるということは非常に難しいことです。だからこそ、信頼できる人に論文を読んでもらうことが大事なのです。筆者は大胆にも、指導教官にも見せずに論文を投稿してしまいました。不採用という結果は、推して知るべしということだったのでしょう。

最初の投稿の後、すっかり自信を無くしてしまい、就職先である中国へ向かった筆者は、結果的に3年間、この研究を封印することになります。

3.3.2 論文執筆の準備

しかし、中国から帰国後の2008年、大学での非常勤勤務を始め、研究業績の必要性を痛感することになります。大学で教鞭を取るためには、非常勤であっても研究業績が求められることが少なくありません。大学での勤務を希望していた筆者は、そこから一念発起して、3年間封印していた研究に向き合わざるを得なくなりました。

筆者は博士課程に進学していなかったため、研究成果や進展を、学会発表や私的な研究会、論文で発表するという形を取りました。

学会発表は、社会言語学会の研究大会で2度、発表しました。その際に注意したことは、分析結果をいくつかに分けて発表することです。下の2つの発表の内容は、いずれも投稿論文の内容に含まれていますが、2008年の発表では「情報提供と理解チェック」に、2009年の発表では「自己発話の修正」に、焦点を絞りました。

- (1) 柳田直美 (2008) 「非母語話者との接触場面において母語話者の情報やりとりストラテジーに接触経験が及ぼす影響—情報提供と理解チェックに着目して—」社会言語学会第22回大会発表論文集、pp.70-73
- (2) 柳田直美 (2009) 「非母語話者との接触場面において母語話者の自己発話の修正に接触経験が及ぼす影響」社会言語学会第23回大会発表論文集、pp.266-269

なぜ2回に分けたのかというと、研究発表では、研究成果を発表するだけでなく、「自分の研究の弱点はどこか」、「自分の研究のわかりにくい点、伝わりにくい点はどこか」、「自分の研究の売りは何か」などを知るために行おうと考えたからです。発表を分けて行うこ

とで、自分の研究の価値を知ったり、伝え方について考えたり、聴衆からアイデアや研究に関する情報をもらうこと、これがわざわざ外部で研究発表を行う意義ではないでしょうか。

また、一方で投稿論文の分析の枠組みに関する以下の論文を執筆し、当時勤務していた留学生センターの紀要に投稿しました。そして、投稿論文では分析の枠組みについての詳細は(3)の論文を引用するという形を取りました。

- (3) 柳田直美 (2009) 「接触場面における母語話者の情報やりとりの特徴の記述—情報やりとりの発話カテゴリーの設定に向けて—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第 24 号、pp.51-68

投稿論文は、どうしても紙幅の関係で、すべてを詳細まで書けないことがあります。このような方法が毎回功を奏するわけではありませんが、一つの方法として、発表と同じように研究成果を分割して発表するというのも考えてはどうかと思います。

3.3.3 論文執筆

2009年10月1日の締切に合わせて投稿するため、2009年夏頃に執筆を開始しました。もっとも苦勞した点は「先行研究」の部分です。「先行研究」は、自分の分野の研究でどこまでが明らかになっていて、何がまだ明らかになっていないかを筋道を立てて示す部分であり、同時に自分の研究の位置づけや意義をアピールする部分でもあります。分析結果と考察はすでに何を書くか決めていましたが、紙幅が限られた中で先行研究をどのようにまとめたらいいいのか、そのことに非常に悩みました。

このように悩んでまとめた先行研究の部分でしたが、研究初心者向けハンドブックである本田他 (2014) で次のように紹介され、自分の研究が先行研究の知見の上に成り立っていることを自覚して先行研究の紹介部分のストーリーを作ることが大切なのだと実感しました。

柳田 (2010) は、表の 4 つの文献を「母語話者の接触経験と共生言語に関する研究」として縦にまとめている。(中略) そして、従来の研究では、教育経験のない母語話者のコミュニケーション方略が十分にあつかわれていない (= 穴) と指摘し、研究課題「母語話者のコミュニケーション方略に接触経験はどのような影響を及ぼすか」へ導いている。つまり、柳田が見つけた「穴」は調査の対象者と言語行動 (情報やり方略) ということになる。(本田他 (2014) p.86)

表1 「表5-2 柳田 (2010) の先行研究の例」

先行研究 著者名 (出版年)	研究の目的 研究の目的 研究課題 仮説	研究の背景 これまでの 研究結果 理論的根拠 研究の重要性	研究方法 主な変数と その定義 データ収集 方法と分析方法	研究結果 主要な結果と結論 研究の背景との関わり 教育的示唆	筆者の研究課題 筆者が導きたい 研究課題	コメント
大槻 (2006)	接触経験と排外 意識との関係	これまで扱われ てこなかった接 触経験4種を取 り上げた	4種類の接触経 験 個人属性 日本人対象	学歴が高い人、能動的 な接触経験がある人 ほど、排外意識が低い を示唆	個人の意識に社 会的要因が関 わっていること を示唆	
岡崎 (1994)	接触経験が言語 に及ぼす影響	言語内共生化と いう過程に言及	記述無し	母語話者も共生言語 を学習すると指摘	接触経験の多寡 によってコミュニ ケーション方 略に違いがある のではないか	
村上 (1997)	接触経験が言語 に与える影響	記述無し	接触経験が異な る4グループ 意味交渉の方法 と頻度	接触頻度が高いグ ループが積極的かつ 強力的 ²	接触経験の違い によって母語話 者の言語行動に 差がある	
増井 (2005)	接触経験を通じ た母語話者の修 復的調整の変化	記述無し	接触経験 修復的調整の頻 度、方法、表現	接触経験によって修 復的調整の頻度、方法、 表現に変化があった	接触経験の違い によって母語話 者の言語行動に 差がある	

本田他 (2014) p.87

3.4 査読コメントと論文修正

3.4.1 査読コメント

以上のように執筆した投稿論文ですが、いよいよ査読コメントが返ってきました。以前の投稿時の不採用の記憶が思い出されましたが、結果は「条件採用」（「指摘された部分を直せば採用しますよ」というものでした。査読コメントは、「論文全体について」、「基本概念の説明について」、「用語の使用について」、「会話の文字起こしデータなどについて」、「調査実施方法について」、「結論について」、「個別の問題」、「その他」など、複数の項目について、本当に一つ一つ、丁寧に書かれていました。

ご指摘はすべてうなずけるものばかりでしたが、やはり落ち込むコメントや、どうしても修正できそうにないコメントもありました。そこで指導教官に相談したところ、以下のようなアドバイスをもらい、論文修正と修正報告を作成しました。論文本体が11ページだったのに対して修正報告が17ページにもなりましたが、査読の先生方とやりとりができる機会を最大限利用し、自分の考えを伝えることができるよう努力しました。

- (1) 基本的に条件を付けられた箇所以外は絶対に修正しない。ただし、文章を縮めないと修正が不可能な場合は、その他の箇所の文章を少しいじる（ただし内容は変えない）ことはできる。

² 原文ママ

- (2) 基本的に条件を付けられた箇所は修正する。ただし、紙幅の都合でどうしても修正することができない場合や、コメントに納得できず修正しない理由がはっきりある場合は、その旨を丁寧に説明し、修正できないことを伝える。
- (3) 修正条件をひとつひとつ取り上げて、どのように修正したか、修正しなかったか（その場合は理由も）を説明する。

3.5 論文投稿で学んだこと

最後に、筆者が論文を投稿するプロセスで学んだことをいくつか挙げておきます。

まずは、準備なしで論文にはならないということと、事前にたくさん人の目を通すことが大切だということです。いきなり論文を書いて一発で査読に通る人はめったにいないと思います。事前に入念に準備することが大事でしょう。内容については、説得力、新規性があることはもちろんですが、「誰が読んでもわかる」ように書く必要があると思います。どんなに素晴らしい内容であっても、それが理解してもらえなければ意味がないと思うのです。

次に、査読コメントに落ち込み過ぎないこと、査読コメントには年会費以上の価値があると思って受け止めるということです。自分の論文の足りない点を指摘されたり、自分の意図が伝わっていない指摘をもらうと、やはり心穏やかではられません。しかし、査読を受けるということは、その分野の第一線の研究者に自分の研究を知ってもらい、また、コメントをもらうことのできる貴重な機会だと思います。その機会を存分に使うことが大切ではないでしょうか。

さらに、「一本の論文で人生が変わる！」こともあります。本節で紹介した投稿論文は幸いにも「第6回日本語教育学会林大記念論文賞」を受賞しました。受賞したことは筆者のその後の研究活動の大きな後押しになりましたし、多くの方に自分の研究を知ってもらいきっかけにもなりました。

以上、偉そうなことばかり並べましたが、筆者自身、今も、次の論文に向けて準備中です。ぜひいっしょに論文を書いていきましょう。

参考文献

- 石黒圭 (2012) 『この1冊できちんと書ける！ 論文・レポートの基本』 日本実業出版社
サンキュー・タツオ (2015) 『へんな論文』 角川学芸出版
本田弘之・岩田一成・義永未央子・渡部倫子 (2014) 『日本語教育学の歩き方 初学者のための研究ガイド』 大阪大学出版会

(いしぐろ けい 言語社会研究科連携教授、
やなぎだ なおみ 国際教育センター講師)